# 延命じぞう

わしのじいさまがそのまたじいさまからきいたという話だから，もうだいぶむかしだわな。いまも神明社のすぐ西にござらっしゃる延命じぞさんは、むかしは屋根もなく雨ざらしで難渋（なんじゅう）してらしたが、それでも村のこどもたちのいい遊び相手になってくれとらした。

北一色村は米の出来も悪いびんぼうな村だったが、むかしはええい草ができて、それでたたみ表（おもて）やほっぽ（雨具の一種）を織っておとうたちが朝それをもってうわまち（上町＝お城のあるほうの町）の市へ売りにいく。こどもたちはおとうの買ってくる土産がたのしみで、おとうを送っていくのがこのじぞさんのところまでだった。晩までじぞさんの前で遊びながらおとうを待っとることもあった。

この村に、じょりというへんな名前のこどもがいたが、この子はかわいそうにおとうがはやり病（やまい）で死んでまって、ほかの子たちのようにおとうのみやげをたのしみに待っとることができなくなってしまった。ほんでもむりをいわず、い草を織るおっかあをよく手伝（てった）っていい子だった。

ある日、じょりがじぞさんの前をとおりかかると、じぞさんのよだれかけがはずれかかっているのに気がついた。ゆんべの風のせいだなと思ったじょりは、手ぎわよう直してさしあげた。そん時に、「なあ、じぞさん、おらのおとうは元気かなあ。いっぺん会ってみてぇなあ」と、お頼みするともなしにお頼みしたそうだ。じょりは、おっかあがいつも「おめぇのおとうは極楽にいっとらせるにきまっとる。元気でやとらっせるでええに」といっているので、そんならたまに会いにきてくれてもええのにと思っとった。そんでもそれはなんとのうおっかあには聞けえせんかった。だで今、ついじぞさんにむりをいったんだが、おっかあにいうんだない、じぞさんにいうんだで、まあ悪いこったないわな。

その晩、じょりの夢の中におとうがあらわれて、「じょり、おめぇはおっかあよう手伝っていい子だ。そんだで、じぞさんがおめぇに会ってこいといってくだれぇて、会いにきた。どだ、わしといっしょにひろこうじでも行こか」こういったと。じょりはうれしくなって「うん」といっておとうにひろこうじにつれていってもらった。

うわまちのひろこうじは、いつもにぎやかでいろんな店もあって、じょりはおとうにあめとやじろべぇのおもちゃを買ってもらった。ある店の前でおとうは「ここはおっかぁがいつもたたみ表を買ってもらうとこだ。おめぁの着るもんもここでいただいた金で買うんだ。ありがてぁとおもわないかんぞ」と話してくれた。

じょりはようやっと目がさめたが、なんと今買ってもらったあめもやじろべぇもちゃんとあるだないか。びっくりしておっかあに夢の話をすると、「ほれみや。おめぁがいい子でやってくれるもんでそうやっておとうが会いにきてくれるんだわ」とおっかあがいった。じょりがすぐにじぞさんにお礼をいいにいったのは、こらあたりめぁだわな。

あそこの延命じぞさんというのはこういうありがてぁじぞさんだ。線香やろうそくで火遊びするなんぞとんでもねえんだぞ。